

資料渉猟余話

その65

飯田下伊那関連の戦後の出版物を見ていると、その発行所に冬至書房、発行者は中島善弥という名前をよく見

かける。すなわち、岸田國士『序文』(1946)、矢高行路『山寺先生 今往来風異聞』(1958)、日夏耿之介の『詩集 呪文』(1965)、岡村二一『詩集 幻想君臨 復刻版』(1972)、久保田正文『冬のランプ』(1972)ほか、個人の俳句集も多い。

おそろく、中島善弥という冬至書房の代表者が飯田下伊那に關係

のある人にちがいないと思つていたら、日夏の戦後直後に寄稿した詩篇が掲載されている『南信月刊』1号(1945年1月)や、やはり日夏の序文が掲載されている『白蝶 林梅翁詩集』(1947)を相次いで読む機会が

あり、奥付がまさに「冬至書房・中島善弥」の名前があった。その後気になつて読んでみた、文芸評論家で日本文芸家協会理事などをつとめた久保田

正文『冬のランプ』(1972)によると久保田と中川京に進出したようだ。文学関係の人脈を生かして、室生犀星をはじめ

と、以下のような経緯が推測できた。昭和21年秋に鈴加町の久保田の生家の2階が最初の冬至書房の事務所だったとある。久保田の回想を参考に、冬至書房や中島善弥の動向をみよると、以下のような経緯が推測できた。

昭和21年秋に鈴加町の久保田の生家の2階が最初の冬至書房の事務所だったとある。久保田の回想を参考に、冬至書房や中島善弥の動向をみよると、以下のような経緯が推測できた。

昭和21年秋に鈴加町の久保田の生家の2階が最初の冬至書房の事務所だったとある。久保田の回想を参考に、冬至書房や中島善弥の動向をみよると、以下のような経緯が推測できた。

昭和21年秋に鈴加町の久保田の生家の2階が最初の冬至書房の事務所だったとある。久保田の回想を参考に、冬至書房や中島善弥の動向をみよると、以下のような経緯が推測できた。

冬至書房と中島善弥

嶋 不 濁

中島自身が、岸田國士などの評論を書いたことと事実(『南信月刊』1号)で、のちに探し考へ、冬至書房や中島善弥の動向をみよると、以下のような経緯が推測できた。

昭和21年秋に鈴加町の久保田の生家の2階が最初の冬至書房の事務所だったとある。久保田の回想を参考に、冬至書房や中島善弥の動向をみよると、以下のような経緯が推測できた。

昭和21年秋に鈴加町の久保田の生家の2階が最初の冬至書房の事務所だったとある。久保田の回想を参考に、冬至書房や中島善弥の動向をみよると、以下のような経緯が推測できた。

昭和21年秋に鈴加町の久保田の生家の2階が最初の冬至書房の事務所だったとある。久保田の回想を参考に、冬至書房や中島善弥の動向をみよると、以下のような経緯が推測できた。

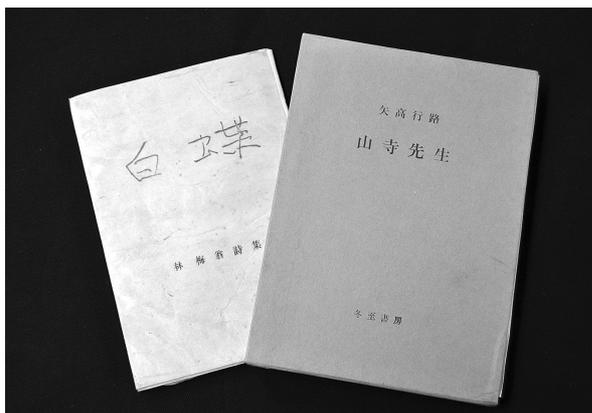
昭和21年秋に鈴加町の久保田の生家の2階が最初の冬至書房の事務所だったとある。久保田の回想を参考に、冬至書房や中島善弥の動向をみよると、以下のような経緯が推測できた。

昭和21年秋に鈴加町の久保田の生家の2階が最初の冬至書房の事務所だったとある。久保田の回想を参考に、冬至書房や中島善弥の動向をみよると、以下のような経緯が推測できた。

昭和21年秋に鈴加町の久保田の生家の2階が最初の冬至書房の事務所だったとある。久保田の回想を参考に、冬至書房や中島善弥の動向をみよると、以下のような経緯が推測できた。



中央、和服姿が善弥



冬至書房刊の本(MSC蔵)

既述の鈴加町の事務所は、昭和22年4月の飯田の大火で焼けて、羽根垣外にうつり事業を続けたが、昭和29年(1954)年には東京に進出したようだ。文学関係の人脈を生かして、室生犀星をはじめとした出版社の名前を譲り受けたとある。として近代詩上、幾多の名詩集を手掛け、また、明治・大正・昭和の三代にわたる叙情詩の名作を『近代文芸詩誌復刻版』として刊行し、学者・研究者・愛好家に多くの支持者を得た。代表的な刊行物は『上田敏全集』(全10巻)。また、近代短歌の主要雑誌である『アララギ』の創刊号からの復刻事業は、約10年の歳月をかけて完成させた。と、現在の冬至書房のHPにはある。中島善弥は飯田市桐林の出身、久保田の生家と関係が深い。前掲、久保田正文の『冬のボプラ』(昭和47年)に中島善弥が刊行しているの、その頃までは元氣だったので、出版界の事情で、マスメディアを対面とした塩沢の調査の網に漏れたものと思われる。